



Title	技術報告 : 余市果樹園の歴史
Author(s)	堀, 廣孝
Citation	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター生物生産研究農場技術業務報告, 8, 81-83
Issue Date	2008-03
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/35010">http://hdl.handle.net/2115/35010</a>
Type	bulletin (article)
File Information	8_p81-83.pdf



[Instructions for use](#)

## 余市果樹園の歴史

生物生産研究農場 余市果樹園 技術専門職員 堀 廣孝

明治45年に、当時の佐藤昌介農科大学長から東北帝国大学総長に提出された果樹園設置許可申請書には、設置理由として、学内園地は条件が良くないので教育研究両面で支障があるから、本道の適地である余市に果樹園を設けたいと述べられている。利用目的は実験用と果樹園経営実習のためであった。リンゴが栽培されている民有地を購入し町有地の寄付も受け、2.6ヘクタールの用地を取得して大正元年に余市果樹園が設置され、当分園芸部に所属させることとなった。

大正4年までは近隣の園主であった高山氏に管理を委嘱し未定植地と樹間空地は小作人に使用させていた。この間に、栽植してあった「国光」などの一部を伐採し、「緋の衣」ほか数品種計150本ほどを定植した。さらに61品種（各1本）の品種試験区を設け、桜桃と西洋梨の見本樹20本も植栽した。大正4年、看守所が建ち、前年から第一農場に勤務していた樋口氏が看守者として移住し、園の管理に当たるようになったが、高山氏も引き続き嘱託として昭和5年まで在職した。

大正10年には、研究事項が多くなり経営実習のための面積が縮小されたので、隣接の民有地約1ヘクタールを購入し、翌年は国有地の所管換えと余市川河川敷30ヘクタール借受けも合わせ経営面積は4.3ヘクタールになった。同12年には作業室が完成し、同15年からは専任職員が2名となって、昭和2年にはリンゴが82品種700本、収穫量2万キログラムであり、ブドウ4品種約35本の新植も行われた。

試験項目としては、リンゴ栽培の経済的経営法その他、病虫害防除、台木と穂木との関係、土壌取り扱い方、剪定法などが含まれ昭和3年にはシマー自動耕耘機を購入して、省力果に関する試験も始められた。

園開設以来、経済果樹園としての記録と調査を行ってきたが、大正5年から昭和4年までの14年間の生産費と収量に関する資料が、星野教授と島助教授の共著として、農場特別報告第3号（昭和6年）に発表されている。

昭和17年には、31年間在職した樋口氏が死去し、その直前書記に昇任した。翌年には教官定員が配置され、昭和12年から勤務していた吉田氏が助手に昇任し、昭和48年まで36年間在職した。昭和25年には教官1名が増員となり、昭和22年から勤務していた三野氏が助手に昇任した。

昭和26年に地元3町村から果樹研究室の寄付を受け、同32年には貯蔵庫が造られた。これは雪を詰めて保冷する方式のものであったが、現在は果実貯蔵専用クーラーを取り付けて使用している。昭和40年までは当園専用のトラクターやスピードスプレーヤーがなく、近隣の園と共同利用していたが、同年秋に購入が認められ、これに伴い車庫も設けられた。（フォドソン42馬力、共立スピードスプレーヤー 牽引式1000ℓ）

ここで思いのある2品種を紹介します、一つは緋の衣です。このリンゴは昭和40年台まで皇居に献上されていた。自分が来たときには、70cm～80cm位の樹の中が空洞になった老木が2本あった。2本で20kg位しか採れなかったが、果実の外側にみつが入っていた品種だった。もう一つは、紅玉です開設時の台帳を見ますと古い品種の中に紅玉があります。紅玉は100年たっても価値をもっております。

昭和2年以後、リンゴの栽植本数は徐々に増加し、同15年には780本に達したが、戦争末期から減少が続き、26年には550本となった。この間の収穫量は変動が大きく、1万キログラム台から最高年は6万キログラムに及んだ。試験項目には従来からのものの他に、施肥、摘花、果、貯蔵（特に「紅玉」のゴム

## 技術報告

病)などが加わった。27年には、「スターキングデリシヤス」と「紅玉」の2品種60本を30アールに栽植して仕立て法の試験区を設け、翌年にはブドウ20アールを植えてつり棚方式を導入した。その後これを使用して、ジベレリン処理による無核化試験が行われた。29年は台風15号による災害で、収穫量はわずか8千キログラム、4万キログラムの落果と多数の折損樹を生じ、80本を伐採処分した。

昭和30年以降、果樹園用地の一部が道路、施設用地などへの転用され樹園地が縮小されてきたため、その代替地の意味も含めて、「リンゴ栽培の省力化試験」を行う目的で、昭和46年に隣接地の園地2ヘクタールを購入した。当面ここに栽植されている木を使用することにし、既存園の老木を整理して48年と、52年の2回に分け全面改植を行った。1回目の1ヘクタールは前述の試験に、2回目の2ヘクタールは、「リンゴおい性栽培の試験」(レツパ<sup>o</sup>・オレゴソス<sup>o</sup>・スタークリームソ、他)に使用した。

昭和55年には管理研究棟が完成し学長も出席して落成式が行われ、58年には作業棟が改築されて、予冷室や選果機も設置された。その後、58年にフォードトラクター(3910、52馬力)が更新、61年に共立スピードスプレーヤー(自走式、1000ℓ)平成3年には芝浦トラクター(21馬力)9年はライトバンが更新され、園地、施設、装備も一応整備された。

その後、昭和60年には老木は経済品種へ更新された。貯蔵性の高い「ふじ」倍数性品種の「陸奥」「高嶺」、みつ発生の多い「こうとく」等の特性のある品種が基礎的研究に利用された。その後、リンゴの木もフラン病などで伐採を余儀なくされ、部分的に改植を行った平成3年に旧高山園に北上、津軽各50本を植え収穫出来るようになると7年にはハスカップを90株(勇払原野から)、8年にはブルーベリー9品種80株(これは人手不足のため小果樹を栽植した。)11年に「ふじ」、12年には桜桃5品種24本、洋梨3品種90本、13年はブドウ2品種21本、14年に「やたか紅玉」15年に「静香」など栽植した。

19年11月には、千両梨57本、リンゴ22本の伐採、抜根、洋梨9本の移植を行った。また、応援に来て頂いた河合氏、市川氏、假屋氏、大嶋氏には、雨雪の中お手伝いを頂き、感謝申し上げます。

20年2月現在リンゴは29品種357本(成木177・若木121・苗木59本)である。

19年度の、収穫量はリンゴ375本、粗収量11515キログラム、販売8549キログラム、ブドウ7品種67本粗収量2541キログラム、販売1613キログラム加工用727キログラム、千両梨、79本粗収量2500キログラム販売2000キログラムであった。

研究面では、「果樹の耐凍性に関する研究」・「果樹の分子生物的分類に関する研究」・「果樹園雑草に関する研究」が1990年代に実施された。近年では2004年の台風18号によるリンゴ樹の倒木多発から、リンゴ根の樹体支持力に関する研究が農場・農学部・中央農試の共同により実施した。

実習は、農場実習1 (生物資源・農業経済・応用生命・生物機能の 各1回)

農場実習2 (生物資源 1回)

家畜生産実習 (畜産学科 1回)

農業工学実習 (農学工学科 2回)

農場学生の特別実習(デラウエアの無核化・リンゴ収穫等)

フレッシュマン教育 (1年生 2002年と2003年開講)

現代GPプログラム(1年生 2006年と2007年開講)

近年では、観光学実習・札幌開成高校・東京農大・余市ウオーキングサークルなど

(果樹の摘果・収穫)実習が行われた。

歴代の職員	教官	(助手) 吉田瀧夫氏	昭和12年から昭和48年
	教官	(助手) 三野義雄氏	昭和25年から平成2年
	教官	(助手) 石川枝津子氏	平成2年から平成8年

高山吉五郎氏 大正4年から昭和5年 ・樋口利喜蔵氏 大正4年から昭和17年  
 石川石五郎氏 昭和元年から昭和11年 ・東 啓一氏 昭和2年から昭和10年  
 中鉢金雄氏 昭和2年から昭和3年 ・宮内静夫氏 昭和21年から昭和40年  
 宮内利家氏 昭和21年から昭和58年 ・小川英子氏 昭和24年から昭和62年  
 宮内幸夫氏 昭和40年から昭和44年 ・亀岡一春氏 昭和45年から昭和48年  
 堀 廣孝 昭和49年から平成20年 ・生田 稔氏 昭和59年から現在に至る  
 以上の方がたが勤められました。

最後に、特に附記すべきこととして次の2件がある。農場事業報告（昭和6年から9年）の余市果樹園の項に、地域の生産者向けに指導を行ったとの記載があり、昭和27年から41年まで毎年1回技術講習会が当園において開催されていたことと、もう一つは、星野・島、両教授の頌徳碑が、果樹生産者を母体とする期成会によって、昭和40年当園に建立されたことである。

法人化後の連続的な予算の減少と定員1名削減（教官）で果樹園管理だけで精一杯の状況となり、廃止論も出てきたが、きのとやとの共同研究で3年くらい継続の予定と聞きました。現状ではやもえないのかと思いつつ、でも何とか残して欲しいと揺れ動いております、今後の推移を見守りたい。

地方施設での苦労も有りましたが、自分としては北大施設としての誇りや使命感を持って勤務してきました。最後に33年間大過なく勤める事が出来ましたのも、先生方、事務方、多くの先輩、同僚の皆様方から、温かいご指導ご鞭撻を頂きましたことで、無事退職する事ができました、本当に有難うございました。

最後に、センターと農場の益々の発展と、皆様方のさらなるご活躍と健康をご祈念致しまして、私の話を閉じさせていただきます。